

『#マークスの山』（高村薫著、1993 年）を読んでみた。本書は、直木賞受賞。「このミステリーがすごい！」1994 年版国内編第 1 位。合田雄一郎シリーズの第 1 作であり、後の『照柿』、『レディ・ジョーカー』へと続く壮大な警察小説群の起点である。直木賞を受賞。2010 年 10 月に WOWOW でドラマ化されているが、私の契約の関係で視聴が難しく、読破することにした。

本作は、エリートたちが過去の殺人を隠蔽するために山で秘密裏に証拠を隠滅した事件が、16 年後に連続殺人事件となって再び動き出す物語である。刑事の合田雄一郎は、この連続殺人の犯人を追う中で、組織の圧力と戦いながら事件の核心に迫る。犯人の「マークス」は、過去の事件に関わる人物であり、被害者への復讐や秘密の告白を通じて、事件の真相が明らかになってゆく。

1976 年、南アルプス北岳で、将来を嘱望された 5 人のエリート（元組員、高級官僚、建設会社社長、弁護士、検事）が、生活ランクの違う N を殺害した。（殺害理由は最後に判明する）。彼らは、この事件を世に知られないよう、北岳の山頂で証拠を隠滅した。

16 年後、N 殺害の恐怖に耐えかねた A が、被害者たちを恐喝し始めるが、病院で死亡する。その後、A の日記を脱図んで知ったマークスが、恐喝を続け、さらに H と M を殺害する。

刑事の合田雄一郎は、H と M の遺体の酷似した傷口（凶器は山岳用具）から、これが連続殺人事件であると確信する。しかし、警察上層部からは合同捜査を禁止する不可解な命令が下り、合田は組織的な圧力に苦しめられる。

連続殺人を犯す犯人は「マークス」と名乗り、秘密の告白を迫る。最終的に、合田は過去の事件の真相と連続殺人の関係に気づき、犯人を追い詰めていく。

合田はどのようにマークスを追い詰めてゆくのか。それは雪が残る山頂。犯人はなぜマークスを名乗ったのか。山岳殺人犯 5 人のエリートの頭文字をとると M A R K S となるのだが。犯人の脳内とどうつながるのか、著者は述べてない。

本作は、社会の闇と人間の深層心理を描き切った、重厚な警察小説である。合田雄一郎の内面と、犯人マークスの脳内葛藤が交錯し、読む者に深い余韻を残す。

事件の背後には、戦後日本の闇、官僚機構の腐敗、学生運動の残滓などが複雑に絡み合い、単なる殺人事件の枠を超えた社会派ミステリーへと展開してゆく。

タイトルの「山」は、物理的な山岳だけでなく、登場人物たちが抱える心の闇や越えられない障壁の象徴と読む。合田自身もまた、過去の登山体験や家族との関係を通じて、内面の「山」と向き合う。

犯人マークスは単なる犯人ではなく、社会に見捨てられた存在として描かれている。精神疾患、制度の隙間、そして人間の孤独が彼を追い詰めていく様は、読者に倫理的な問いを突きつける。

合田は冷静な刑事でありながら、事件を通して自らの過去や感情と向き合っている。特に雪山での回想や、犯人との対峙は、彼の人間性を浮き彫りにする。

合田雄一郎シリーズは6作。再読を含めて、残り5作を読むのが楽しみだ（『レディ・ジョーカー』はドラマを視聴済み）。

評価：★★★★★